

肥後象嵌

肥後は熊本の旧称であり、伝統工芸品である肥後象嵌は、鉄に複雑な文様を彫り込み、銀や金で象嵌したものです。鉄に錆び止めを施し、茶液で黒くすることで、非常に強い色のコントラストを生み出しています。

もともとはヨーロッパから日本に伝わった技術です。17世紀初頭、細川忠興（1563-1646）が近江国（現在の滋賀県）から連れてきた鍛冶屋・平田彦三のもとで、人気の工芸品となりました。地元の金工職人たちは、装飾を施した武士専用の銃身や刀の鰐、煙管などの生産を始めました。

市場の変化

1876年、明治政府が廃刀令を出し、数世紀にわたって武士に与えられていた特権を剥奪したことで、肥後の象嵌市場は基盤が崩れました。そのため、職人たちはより身分の低い客層のニーズに応えることを余儀なくされました。現在も熊本ではおよそ15人の肥後象嵌職人が活動しており、カフスボタン、ネクタイピン、ペンダント、ペンなどを作っています。いま、この伝統工芸品の普及に向けた国の取り組みが行われています。2016年に日本で開催されたG7サミットでは、安倍晋三首相（当時）が世界の首脳に肥後象嵌を施した万年筆を贈りました。IHFの2019年世界女子ハンドボール選手権（第24回）が熊本で開催された際には、メダルに肥後象嵌が施されていました。

詳細は熊本県伝統工芸館で確認でき、城の近くにある老舗のお店ではワークショップも開催されています。